

## 自由工房

### 子どもたちの粘土開放日

友の会より寄贈された土練機と1t程の水粘土を使用し、少量での物作りとは違った感覚で粘土遊びを体験する会を実施した。親子での参加を基本とし、午前と午後の2つの時間帯を設けた。技術的指導はなし。

この粘土開放日をはじめ、実技講座、粘土ワークショップで実技室ボランティアさんにお手伝いいただく場面が今年度も多数あった。平成12年度から呼びかけに応じていただいております、なくてはならない存在である。(実技室ボランティアの皆さん=朝倉文雄・久米妙子・栗田寿英・原千晴)

期 間 = 毎月第4日曜日を基本とし本年度は計12回実施した。

講 師 = 石上和弘(彫刻家)・持塚三樹

場 所 = 当館実技室

参加者数 = 1,688名

### 夏季自由工房「思い出ぎゅっとBOX」

日 時 = 平成15年8月8・12・13・14・15日

午 前 = 10:15~12:15

午 後 = 13:00~15:00

講 師 = 内海健夫・鶴谷由子・橋本 薫

場 所 = 当館実技室・展示室

参加者数 = 45名

夏休み中に開催された収蔵品展「今日の美術・彩」の鑑賞と実技をあわせたワークショップを開催した。このワークショップは、まず展示室での鑑賞から始まる。出品作品の中から、美術館が選んだ三つの作品(田中敦子《1985A》、モーリス・ルイス《ベス・アイン》、李禹煥《線より》)をじっくり鑑賞し、次は実技室に戻って、いま見てきたばかりの作品を作家の気持ちになって描く。例えば、李禹煥作《線より》だったら、「精神統一して、一本の線を描くことに集中する。描く時は息を止めて一筆入魂する。」といった具合である。60cm四方の紙の裏側には既に展開図が描かれていて、それをカッターナイフで切り抜き組み立てると箱の出来上がり。二次元の作品が、三次元の作品に生まれ変わる面白さと、描いた作品が正立方体の六面に予想できない形で現れる意外性を楽しんでいただいた。カラフルな色使いが人気の理由か、子ども達が最も好んで選んだ作品は、田中敦子作《1985A》であった。

8月8日、12、13、14、15日の5日間、午前と午後の計10回の参加者は45名。お盆の時期と重なったため、家族そろっての参加や帰省中の方の参加が目立った

(子ども36名、大人9名)。箱を開けるたびに、家族みんなで作ったことやお気に入りの絵が浮かんでくる。そんな美術館で過ごした夏休みのひとときの思い出を、参加者それぞれがぎゅっと詰め込んでお持ち帰りいただけたと思う。

### 春季自由工房

『おおきなところに絵を描こう』

開 催 日 = 3月21日(日) 10:00~12:00

参加者数 = 119名

場 所 = 県民ギャラリー前の展示テラス

人通りの少ない道路などに描かれた子どもたちの世界。大人であれば一度は経験しているはずの落書きが最近見られなくなった。仕切られた画用紙ではなく、地面のように無限大のキャンパスに絵を描きたいと誰でも思うはず。県民ギャラリー前の屋外展示テラスの石畳に、チョークを使って思いっきり絵を描いてもらう。言わば、粘土開放日のお絵かきバージョン。何を描くかは自由、描くだけでなく描きながら遊ぶ親子の姿が復活した。



おおきなところに絵を描こう